

# ディスコース形成と構文機能について

伊 藤 晃  
(基盤教育センター)

## キーワード

談話、トピック、伝聞表現、分裂文、非限定的修飾

## 要旨

談話にトピックを導入する際に用いられる言語形式として、伝聞表現、分裂文および非限定的修飾節を取り上げ、それぞれの言語形式が談話において果たす機能の特徴について詳述した。

## 1. はじめに

言語分析においては、語、句、文等をその対象とすることが考えられるが、文を超えた単位である談話を分析対象とすることも可能である。談話を構成する重要な要素の一つとしてトピックをあげることが出来るが、トピックを談話に導入する言語形式は一様ではない。

トピックを中心に談話の展開を見た場合、トピックには、談話全体を通してのトピックであるディスコーストピックとその下位範疇ともいべきサブトピックがあると考えられる。ディスコーストピックが談話全体のトピックであるのに対して、サブトピックは、談話が展開される中で、他のトピックに取って代わられる一時的なトピックとでもいべきトピックである。

小論では、談話にトピックを導入する際に用いられる言語形式について考察する。取り上げられる言語形式は、伝聞表現、分裂文および非限定的修飾節であり、それぞれの言語形式が談話において果たす機能の特徴について詳述する。次の第2節では、伝聞表現を、第3節では、分裂文を、そして第4節では、非限定的修飾節を取り上げる。第5節は、まとめである。

## 2. ディスコーストピックを導入する言語形式

本節では、伝聞表現が談話において果たす役割について考察を進める。日本語の伝聞表現を観察すると、次例のように、同表現が談話の冒頭に現れうることが分かる。(＃は談話の冒頭であることを示す。)

- (1) #懲戒免職になった米デンバー前総領事はパーティー参加者から「閣下」「閣下殿」と奉られていたという。館員にも自分を「閣下」と呼ばせていたそうだ。前総領事は週に1～2回、日系人を招いて小規模なパーティーを開いて懇談していたというから積極的な人だったに違いない。それにしても「閣下殿」とは！盛り場でサラリーマンが「社長」と声をかけられて、仕方がない、一杯やるか、とでれでれになるあのメカニズム。(毎日新聞 7月28日2001年)

類例を以下にいくつかあげる。

- (2) #「幸運が重なった」と興奮気味に語ったという。世界一周を果たしたあと、サハリン沖で消息を絶ち、漂流しているところを無事救助された幸運な4人。4人の乗った「ピラタスPC12」は飛行中、エンジンが突然停止し、海上に不時着した。折から無風状態で、着水時の衝撃がなかったこと、救命ボートに保温着と非常食があったこと、未明だったために発射した信号弾で相手の貨物船がすぐに応じてくれたこと・・・幸運の連鎖だ。(毎日新聞 7月10日2001年)

- (3) #薬害エイズ事件の松村明仁被告は東京地裁で検察側から禁固3年を求刑された瞬間、無表情で3年と書き込み、丸で囲んだという。無意識に役所の癖が出たのだろう。この元厚生省生物製剤課長は公判で「わが国では血友病患者の中でクリオ製剤の使用者が少なく」「わが国の血液事業もやっと近代化され」「わが国においては外国由来の血漿に頼ることをやめ」などと「わが国」を連発していた。「わが国」というのも役人の癖だ。(毎日新聞 12月29日2000年)

このような談話の冒頭部分に現れる伝聞表現が談話において果たしている機能は、談話にトピックを導入することであると思われる。次例では、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「情報を思い出すには覚えるよりも相当多くの時間を要すること」がトピックとして談話に導入され、後続部分に導入されたトピックに関する記述が続いていることが分かる。

- (4) #情報を思い出す時間は覚える時間の35倍かかるという。科学技術振興事業団プロジェクトと岡崎国立共同研究機構生理学研究所などがサルを使って実験した結果だそうだ。かく言う人間も「ええ、それはですね、つまりその・・・」と冷や汗をかきながら懸命に思い出そうとすることがしょっちゅうある。せっかくのどまで出かけたの

に、脳の奥にさっさと薄情に引っ込むことだってないわけではない。サル君の記憶力は大したものだ。(毎日新聞 1月27日2001年)

さらに以下にあげる例を検討してみよう。

- (5) #ワシントンで覚えた言葉だが、米軍に「マザー・テスト」という俗語があるそうだ。国民の命を預かり、兵士を危険な任務に送る最高責任者は大統領。その資質と判断を問う試練をさす。大統領は命令書にサインするだけ。死ぬのは一線の兵士たちだ。命令とはいえど、愛する息子や娘を奪われた母親たちは嘆き、悲しみ、どん底に沈む。その時、それがいかに国家のために尊い犠牲だったかを衷心から説明し、納得してもらおう。母(マザー)の許しを求める試練だから「マザー・テスト」。自ら死地に身をさらさない最高司令官の究極の使命だ。(毎日新聞 9月24日2002年)

本例においては、談話の冒頭に現れた伝聞表現によって「マザー・テスト」が談話にトピックとして導入されており、後続する文脈にこの「マザー・テスト」に関する記述が現れていることが良く分かる。類例を以下にいくつかあげておく。

- (6) #アフリカ大陸の最西端セネガルは土地の言葉で「私の舟」、中西部のカメルーンは「エビの多い川」という意味だそうだ。たゆたう舟、悠然と流れる川。セネガル代表チームの事前キャンプ地、静岡県藤枝市のW杯担当課長が自殺した。課長は「日本と感覚が違うので大変」と周囲にこぼしていたという。セネガル代表の到着が遅れたり、届くはずの民芸品が来なかったり、気をもむことが多く、気の毒に神経をすり減らしたようだ。(毎日新聞 5月22日2002年)

- (7) #来年度から使われる高校国語教科書に作家・山田詠美さんの小説「ぼくは勉強ができない」が載ることになっていたが、検定意見がついて別の作家の作品と差し替えられたそうだ。問題になったのは、作中で小学5年生の同級生がもらした「馬鹿だから」という一言。検定で「特定の児童に対する差別的な言動についての適切な手当がなく、必要な配慮を欠いている」と指摘され、出版社は自主的に山田さんの作品を削除した。(毎日新聞 4月11日2002年)

- (8) #英国の翻訳会社が、世界の言語学者100人に翻訳の難しい単語は何か聞いたそうだ。その結果、1番になったのはコンゴ共和国南東部で用いられるテルーバ語の「ilunga」だった。その意味は「1度目はどんな悪口を言われても許し、2度目も我慢するが、3度目は絶対許さない人物」だ。第2位はイディッシュ語(東欧のユダヤ系言語)の「shimazl」で「慢性的に不幸な人」である。(毎日新聞 7月25日2004年)

本稿では、「という」「そうだ」といった表現以外に、「ようだ」「らしい」といった表現も伝聞表現として扱う。以下に見られるように、「ようだ」「らしい」といった表現は、「という」「そ

うだ」といった表現と同様に、情報の出所を表す「～によると」という表現と共起しうるからである。

- (9) 新聞によると、事故で50人が死亡したという／そうだ／ようだ／らしい／\*だろう  
／\*かもしれない／\*にちがいない。
- (10) 花子によると、太郎は大学に合格したという／そうだ／ようだ／らしい／\*だろう  
／\*かもしれない／\*にちがいない。

以下の例では、談話の冒頭に伝聞表現「ようだ」「らしい」が現れ、これまでに見た例と同様にトピック導入機能を果たしている。

- (11) #昔の人はヘビの脱皮を見て、生命そのものが再生し、若返るのだと考えたようだ。  
古代メソポタミアの「ギルガメッシュ叙事詩」には王ギルガメッシュが、永遠の生命を求める遍歴で不死の草を手に入れながら、ヘビにその草を盗まれてしまうという物語がある。沖縄の昔話にも、神がヘビを殺そうとして死水と生き水を浴びるよう動物たちに命じたが、頭のいいヘビだけがみんなより先にきて不死の生き水を浴びてしまう話がある。おかげで他の動物は死水を浴びて死を運命づけられてしまった。(毎日新聞 9月23日2003年)
- (12) #北朝鮮の金正日総書記がおかんむりのようだ。きっかけは「米國務省きつてのタカ派」と呼ばれるポルトン國務次官が先月末、ソウルで行った講演だ。「金正日は」と41回も呼び捨てで連呼し、痛烈に非難したからだそうだ。さっそく講演の全文を読んできた。「金正日は自らの失政の結果を受け止めずに王族のような暮らしを楽しみ、数十万人を収容所に監禁している」「数百万の民は絶望的貧困の中で、泥をあさって食物を探している」「国民の生活は地獄のような悪夢だ」とは確かに手厳しい。(毎日新聞 8月18日2003年)
- (13) #古くから「完全なる大使」がいろいろ論じられてきたらしい。16世紀末のイタリア人の著作をもとに、矢田部厚彦氏が現代版「完全なる大使」を描いている。「職業としての外交官」文春新書)。以下、その短縮版。《英語は当然。ほかに仏・独・露・スペイン・アラビア・中国語のいずれか(できれば複数)に堪能で、国際法・公法・私法に通じ、国際経済はもとより経済・財政全般、環境、人口、老人問題、軍事戦略に関する豊富な知識と、科学技術的常識、文学・音楽・美術に関する深い教養を持つ》。(毎日新聞 7月30日2002年)
- (14) #清少納言はかなりの碁打ちだったらしい。「あそびわざは、小弓。碁」と「枕草子」にある。囲碁は中国で生まれた。日本に伝わったのはかなり古い。奈良時代にはもうあちこちの貴族の館で碁石の音が響いていたと思われる。縦横19本(路)の線が盤上

に361個の交点(目)を作る。黑白二つの石が、この目の陣取り合戦をする。黒が先番。やはり先に打つ方が有利である。公式戦ではコミというハンディが設定されている。(毎日新聞 10月17日2002年)

以下にあげる例では、情報の出所が「～によると」といった言語表現によって明示されている。

(15) #旧約聖書によると、はじめてワインを飲んで酔っ払い、裸になった人類はノアだそうだ。箱船を出てノアは農民となり、ブドウ畑をつくり、ブドウ酒を仕込んだという。大洪水のあと、箱船の着いた場所がアララテの山。トルコとアルメニア国境に接するアララト山(5165メートル)がそれらしい。ノアの子孫がアルメニア人と現地の人は信じている。そのアララト山から約50キロ離れた首都エレバンでとんでもない事件が持ち上がった。(毎日新聞 10月29日1999年)

(16) #最近、粗集計の終わった国際交流基金の調査によると、1998年度に世界で日本語を学習している人の数は約200万人に上るそうだ。年次をさかのぼって累積すると、現在、世界で日本語を勉強している人々の数は少なく見積もっても500万人。正規の学校を経ないで、体験的に日本語を身につけた人々を含めると、1000万人を超える人々が日本語を話すようになってきている、と社会学者の加藤秀俊さんは推測している。(毎日新聞 6月26日1999年)

トピックには、談話全体のトピックとして設定されうるものと、談話が展開する中で他のトピックに取って代わられる一時的なトピックとでもいうべきものとに分けることが可能であると思われるが、伝聞表現によって談話の冒頭に導入されるトピックは談話全体のトピックとして機能していると思われる。この点が次節で見る分裂文によるトピック導入と異なるところであろう。詳細は、第3節で述べるが、分裂文によってトピックが談話に導入される場合は、同構文が談話の冒頭部分に現れる例も含めて、談話全体のトピックであるとは考えられず、一時的なものであると考えられるからである。

以下にあげるのは、談話の冒頭部分に現れた伝聞表現によって導入された要素が談話全体のトピックであることが明示的に理解されうる例である。談話の冒頭部分と最後の部分を示してある。

(17) #かたくなに我意を押し通すことを「いこじ」というが、一説には意地っ張りで頑固であることを示す「いこづる」という古語から生まれたという。それが「依怙地」とあて字をされるようになったのは、とかく我意は「依怙」一偏りを生じやすいからだろう。首相として終戦の日に21年ぶりの靖国参拝に踏み切った小泉純一郎首相は、むろん自分を依怙地とは思っていないに違いない。むしろ別の説で「いこじ」の語源とされる「意気地」を、5年前の公約実現という形で通したつもりなのかもしれない。

(中略) ほかならぬ日本国民とその子孫の運命を一身に担う首相である。一国の指導者の行動はそれがどんな善意や理想によるものであれ、判断を誤れば国民、国家を危うくする。その責任をすべて潔く引き受けるのが政治家の誇りのはずだ。そこに「世界注視の私事」などあろうはずがない。依怙地も、意気地もどだい我執である。政治指導者が一瞬も目を離してはならないのは、公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果であり、それにとまなう責任だ。政権末期だといってタンカで見物人を喜ばせている場合ではない。(毎日新聞 8月16日2006年)

談話の冒頭において「いこじ」がトピックとして伝聞表現によって導入され、同要素が中略部分をはさんで、談話の最後の部分にいたってもトピックであり続けていることが分かる。このことは、特に談話の最後の部分の下線部に見て取ることが可能であると思われる。以下にあげる例についても同様の分析があてはまる。

(18) # 「揣摩憶測」は当て推量のことだが、昔の中国には“揣摩の術”というのがあったそうだ。人の心を読み取る術のことで、戦国時代、強国の秦に対する共同戦線—「合従」策を他の6国に説いた蘇秦はこの術を使ったという。「鶏口となるも、牛後となるなかれ」は、その蘇秦が小国の韓の王に、秦への服従を思いとどまるよう説得した際に使った当時のことわざだ。王の自尊心を読み、それを操って対秦同盟への参加を決断させたわけで、これも術の成果なのだろうか。(中略) この手のM&Aが日本でも珍しくなくなるかどうかを占ううえでも注目を集める両ケースだ。株主はもちろん、従業員などのステークホルダー(利害関係者)の心を読み、その理解を得られるのはいったい誰か。揣摩の力量が試される。(毎日新聞 8月9日2006年)

(19) # 「早起きは三文の得」とは、一説に早寝早起きで夜の灯火の油代が節約できたからだといわれる。実際、江戸時代の庶民にとって油代はかなりの負担だったようだ。暗くなったら寝てしまうのが手っ取り早い生活防衛策だった。灯油に主に使われたのは菜種油で、江戸後期の文化年間には1升(1.8リットル)400文程度の値段だったという。仮に1文30円で換算すると1万2000円だから、今から見てもとんでもない高値である。貧しい庶民は、安値だがニオイのきついイワシの油をがまんして使ったそうだ。(中略) ガソリンの小売価格が最高値を更新したとのニュースが人々のまゆをひそめさせる夏だ。将来を期待されるバイオ燃料もいいことばかりでもない。ここは油代の高値を、省エネのライフスタイルでしのいだご先祖の知恵に学びたい。(毎日新聞 8月10日2006年)

(20) # 「こころ」は「凝る」という言葉から生まれたとの説が有力だという。「広辞苑」には「禽獣などの臓腑のすがたを見て、コル(凝)またはココルといったのが語源か。

転じて、人間の内臓の通称となり、更に精神の意味に進んだ」という説明が最初に書かれている。なるほど心は、ややもすれば凝り固まりがちだ。いつものやかに、伸びやかな気持ちで生きたいとは誰もが願う。しかし人の世の幾重にも重なるしがらみの中で、人の心はやがて自由を失い、時には動きがとれないまでに固まってしまう。(中略) 問われているのは、学校の考える「いじめ」の定義ではない。なぜ少女の生きるはずの未来が失われたのか、なぜそれを救えなかったのか—である。この間の各地のいじめ問題での学校や教育委員会の有り様を見れば、「いじめ」を認めようとならない心の凝り固まりが、子供をいっそう追い詰めてはいないかと心配になる。いじめにあっている少年少女にはもう一度呼びかけたい。いじめは君の心の自由を奪い、絶望で凝り固まらせようとする卑劣な行為だ。決して君にしか描けない君の将来の夢を断ち切ってはいけない。(毎日新聞 10月31日2006年)

トピックの生起位置について考えてみた場合、談話全体のトピックは、談話の初め、中ごろ、終わりのうち、談話の冒頭部分に設定されるのが自然であると考えられる。しかしながら、談話の冒頭部分は、先行文脈が存在しないため、通常、聞き手の知識に依存する形での情報提示が困難である。本節では、伝聞表現が談話の冒頭部分に現れ、談話全体のトピックを導入している例を見てきたが、伝聞表現は、情報の出所が話し手でも聞き手でもないことを明示する言語形式である。伝聞表現を用いることで、話し手は、聞き手の知識状態に依存することなしに情報を提示することが可能になるわけである。先行文脈が存在せず、通常、聞き手の知識に依存することが出来ない談話の冒頭部分であっても、伝聞表現を用いて談話主題を提示することは可能である。

### 3. サブトピックを導入する言語形式

本節では、分裂文の構文上の特徴を簡単に見た後、この構文が談話において果たす機能を分析し、同構文が持ついくつかの機能の中にトピックを導入する機能が認められることを確認する。

#### 3.1. 日本語の分裂文

英語には(21)のような文から派生された(22),(23)のような文が存在する。

- (21) John bought a car.
- (22) What John bought is a car.
- (23) It is a car that John bought.

(23)はCleft SentenceあるいはIt-Cleftとよばれ、(22)はPseudo-CleftあるいはWh-Cleftとよばれる。英語のCleftに相当する日本語の構文は(24)のような文から派生された(25)のような文である。(26)は(25)の文構造を示したものである。

(24) 太郎は車を買った。

(25) 太郎が買ったのは車だ。

(26) [[太郎が買ったの]は車だ]

(25) では、(24) においては同一文中にあった「太郎」と「車」が、(26)に示されるように、従属節中の要素と主節中の要素に分裂する形で現れている。(25)のような文は「太郎が買ったのは他の何物でもなく車だ。」といった読みが与えられることから「強調構文」とよばれることが多いが小論では「分裂文」あるいは「XのはYだ」構文といった呼び方をする。また、「トピック」と「話題」を特に区別せずに用いる場合がある。

### 3.2. 日本語の分裂文の談話における機能

#### 3.2.1. 話題導入機能

談話における日本語の分裂文／XのはYだ構文の主たる機能は談話に話題を導入することである。先行文脈を受けはするが、話者は聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているわけではない。聞き手の知識の状態とは関係なく新たに導入された話題、「Y」に注意を引き付けて話を展開して行くのである。同構文は「前提＋焦点」の情報構造を持つことから英語のWh-Cleftによりよく対応すると考えられるが、英語のWh-Cleftの前提部分がPrince (1978) が指摘しているように聞き手が考えていると話者が想定しうるような情報を表しているのに対して日本語の分裂文の前提部分、「X」にはそのような特徴は認められない。機能的には、むしろPrince (1978) のいうInformative Presupposition It-Cleftに近いと思われる。例を見てみよう。

(27) 一人の子供が棧橋から飛び込んだ。そのまま12,3メートルの海底まで潜り、足首に留めていたナイフで段ボール箱の封を裂いた。箱にびっしりと詰まっていたのはレコード盤だった。子供はその中の一枚を持って浮上し、男に、これ貰っていいですか？と聞いた。子供が手に握っていたレコードのジャケットは、大きくてキラキラした黒い車から降りる夜会服の女の写真だった。(村上龍「悲しき熱帯」)

分裂文によって談話に話題、「レコード盤」を導入し、後続部分で「レコード盤」についての記述が行われているのが分かる。以下の例についても同様である。

(28) こうして、それから5年間、毎年10月から春まで向こうでコタツ売り。コタツの土壌があったので商品の説明には困らなかったが、手を焼いたのは、その国民性に基づ



く商法でした。「昨年10台売ったから、今年は30台を」と頼むと、向こうは客待ち商法なのでのんびりしたもの。「去年は寒かったから売れただけ。今年はどうなるかわからない。インシャラー（アラーの神のおぼしめしのままに）。」どこに行っても、「インシャラー。インシャラー」という厚い壁。営業努力という言葉はここにはなく、自然の成り行きのみです。（毎日新聞 9月25日1991年）

- (29) 事件後、子供たちは風の子学園がある小佐木島を訪ね、機関紙で「事件緊急特集号」を組んだ。少年、少女の死について「園長が死なせた、というが、二人の心を殺したのは周囲だ」と書いたのは多々良浩君（18）＝愛媛県越智郡生名村＝だ。多々良君は、高校入学後、学校へ行かなくなった。半年後退学。風の子学園から母へ入学案内が届いた。「こんなところへ入れるつもりなんか」。多々良君は食ってかかった。（毎日新聞 8月29日1991年）

(27),(28),(29)では分裂文によってトピックが導入され、その直後にそのトピックについての記述が現れているが、次例に見られるように導入された話題とそれについての記述との間に他の要素が介在し分裂文の話題導入機能が読み取りにくくなる場合がある。

- (30) 革命から、絶え間無い衝突と流血へ。内戦、飢餓、農村荒廃、大粛清、第二次大戦へと、数千万人の人々の血が流れた。ソ連が再びその道を歩むのではないか。人々の不安は消えないのである。しかし、ソ連の将来への不安以上に、私が素直に受け入れられないのは、声高に叫ばれる社会主義への追及の声である。すでに東欧革命が始まる前、米国のブレジンスキー元大統領補佐官は共産主義の大崩壊を予告していた。（中略）ナチス・ドイツの強制収容所よりひどい「収容所群島」が存在し、ナチス・ドイツ以上の犠牲者を出した弁解のできない歴史があったことも、もちろん知っていた。しかし、私はレーニン像を倒し、社会主義を罵倒する人々の姿に声援を送る気持ちはなれなかった。同じような光景が東欧でも繰り返されたが、あの時よりも、私の気持ちは冷めていた。勝てば官軍で、人々は共産党員を非難し、「共産党はわれわれを支配し、隷属させていた」と口々に叫ぶ。確かに事実はそうだったかもしれない。（毎日新聞 9月19日1991年）

先に日本語の分裂文は、先行文脈を受けはするが英語の Wh-Cleft と違って前提部分は聞き手の意識の中に存在すると話者が想定しうるような情報を表してはいない。つまり話者は聞き手の知識の状態について何らかの想定を行っているわけではないと述べた。このことをもう少し詳しく見ておこう。これまであげた例には先行文脈とのつながりが比較的容易に理解されるものが多かったが次のような例ではどうだろう。

- (31) そんなある日、作家の土師清二先生が、突然訪ねて下さったのです。家の暮らしぶ

りを見て「若いうちの苦勞は、かっても出るもの。頑張んなさいよ」。そうおっしゃって結婚祝いにデパートの商品券を下さいました。なにはともあれ、一番最初に買わせていただいたのは、まな板でした。(板きれをまな板がわりにしていたのです)抱えて帰って一尺五寸(約50センチ)ほどの流しに同じ大きさの新品のまな板を置いたら、何だか勇気がふつつつとわいたのです。恩情をいただいた私は、強くなっていました。(毎日新聞 7月4日1991年)

「商品券をもらえばそれで何かを買う」と聞き手は考えているといった想定を話者が行っていると解釈することは可能であろう。次の(32),(33)についても同様に先行文脈とのつながりが何らかの推論によって理解されると考えることはできるだろう。

(32) その前年(1972年)の6月、私は久し振りにアイヌ民族と話す機会があった。北海道を転任で去って以来ちょうど10年ぶりである。それは日高の平取町二風谷に完成した「二見谷アイヌ文化資料館」の開館式に出席、取材するためであった。今ではかなり知られるようになったアイヌ出身の民族学者、萱野茂氏の永年の努力の結晶である。まず注目したのは、この資料館の正式名が「アイヌ文化」となっている点だった。10年前だったらおそらく「ウタリ文化」とされたに違いない。それが堂々と「アイヌ」を正面にすえたのだ。会場で多くのアイヌたちと話して、こうした変化の背景をかなり理解することができた。(本多勝一「日本人は美しいか」)

(33) 全く身に覚えのないAさんとしては、否認した。裁判になった。証言台の警官によれば、Aさんは先行車を追い上げる状態で右側車線を走ったという。担当弁護士がまず重視したのは警官のメモだ。メモは「現認係」(実際に走行車を見て判断する係)によるものと、その報告を受けて停止させる係によるものの二種があるが、後者のメモが明らかに走り書きなのに対し、前者は各車の車種、商品名、色、走行状態が、あまりにも整然たる楷書の漢字とともにギッシリ記入されている。これは裁判にそなえて、停止係のメモから逆にでっちあげた二セ・メモではないか……。 (本多勝一「日本人は美しいか」)

(32)では、取材の目的で資料館を訪れたのであれば取材対象である資料館の何かに注目するはずであるといった解釈を与えることができよう。一方、(33)については、裁判には弁護士がつきもので弁護士は訴訟を進める際に何かを重視するといった推論を行うことで先行文脈とのつながりが認められるかもしれない。いずれにせよ、(31),(32),(33)の各例においても分裂文によってトピック、「まな板」、「資料館の正式名が「アイヌ文化」となっている点」、「警官のメモ」が談話に導入され、後続部分でこれらに関する記述が続く形で話が展開されていることに注意されたい。(31),(32),(33)では先行文脈とのつながりが明示的な形では現れていないもの話者

が聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っていると考えられることは可能であったが、以下にあげる例ではそのように考えることさえできないように思われる。

- (34) 約57億円をかけ、今春開校したばかりの東京都立新宿山吹高校。刈谷東の普通科2コースに対し、普通科と情報科で6コースと多様な講座が用意されている。驚かされるのは、チャイムの鳴らない校内を好きな服装で闊歩する生徒の意欲の高さだ。「親に頼るのが嫌だから、就職して通えるところを選んだ」「中学では登校拒否になったけど、ここなら自分のペースで勉強できる」と話す個性派ぞろい。(毎日新聞 7月5日1991年)

本例のように分裂文／XのはYだ構文のXの部分に話者の感情、主観的な判断等を表す表現が用いられている場合、先行文脈とのつながりを何らかの形で認めようとするのは無理である。聞き手との共有知識、聞き手の知識に関する話者の想定といったこととは無関係に分裂文を使って談話に話題を導入し話を展開していると思なすのが自然である。(34)のような分裂文の用いられ方は決して例外的なものではない。(35),(36)を参照されたい。

- (35) 本多 …だから前提としておかしいのだけれども、いちおうそういう意味で、条件をつけたうえでいえば、たとえば差別をつくるとき一番やりやすいのは、見てすぐちがうものがあるときです。たとえば身体障害者だとか、色がちがうとか。そういう意味でいうと、アイヌは見た目にちがいがわかりやすい。毛深いとか、あるいは何と無く…。

青田 ほりが深い…。

- 本多 違って見えるでしょう。すると差別がやりやすい。おもしろいと思うのは、今の青田さんがいった「ほりが深い」という表現をめぐるカルチュア（文化）ですが、日本の伝統的な物の見方からいえば、「ほりが深い」ということはいいことではなかったわけです、けっして。「ほりが深い」ということばじたいがおかしいのね。(本多勝一「日本人は美しいか」)

- (36) 総理府がころみた「教育に関する世論調査」について、朝日新聞が紹介した記事の前書き（リード部分）の冒頭をそのまま引用すれば次のようになる（1983年3月7日朝刊から）。(中略)「なるほど。やっぱり」と思ひながら連想したのは、戦争中の日本の親の姿であった。徴兵されたわが子を戦場に送る当時の母親たちの心理は次の3種に大別されたであろう。(本多勝一「日本人は美しいか」)

(34),(35),(36)についてもこれまで見てきた分裂文の例と同様に、それぞれの分裂文によって導入された話題、「生徒の意欲の高さ」、「ほりが深い」という表現をめぐるカルチュア、「戦争中の日本の親の姿」についての記述が後続部分に認められることはいうまでもない。

これまでの議論で日本語の分裂文の談話における主たる機能は、話題を導入することであるということが明らかになったと思う。以下では、このような分裂文の機能をさらに詳細に分析していくことにする。

### 3.2.2. 談話の冒頭に現れる分裂文

次の(37)に見られるように分裂文は談話の冒頭に現れることがある。(＃は談話の冒頭であることを示す)

- (37) ＃中国残留日本人孤児と呼ばれる人々がはじめて来日したのは1981年だった。以来、写真家、新正卓さんは宿舎の東京、代々木オリンピック記念青少年センターに通って、全員の写真を撮り続けた。(毎日新聞 1989年)

3.2.1. において日本語の分裂文では、話者は聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているのではないと述べたが、(37)のような分裂文の存在はこの主張を支持している。先行文脈が存在しないからである。(38)についても同様である。

- (38) ＃中国の「鱧」という文字に「ワニ」をあてたのは古代日本人の誤訳だったそうだ。山陰や大和、四国、九州ではフカのことをワニといった。実物を知らぬ知識人が誤って鱧をワニと訳してしまった。(毎日新聞 1989年)

(37),(38)のような例について、分裂文/XのはYだ構文のXの部分は話者と聞き手との間に共有された一般的な知識を表している(言外の)先行文脈とのつながりが認められると考えるむきもあろう。確かに(37),(38)や次の(39),(40)についてはそのような解釈が妥当であるかのように感じられる。

- (39) ＃五党党首による公開討論会が開始されたのは平成2年2月2日午後2時2分だった。偶然だが、2が5つそろった記念すべき討論会。(毎日新聞 2月16日1990年)

- (40) ＃三沢(青森)のエース、太田孝司が松山商(愛媛)を相手に延長18回を投げ抜いたのは昭和44年、夏の甲子園決勝だったが、その4か月前、センバツでも長いマウンドを踏んでいた。(毎日新聞 3月19日1990年)

しかしながら、次の(41),(42)の分裂文のXの部分が話者と聞き手との間に共有された一般的な知識を表しているとは考えにくい。

- (41) ＃井下田憲さんが異常に気付いたのは4年前の10月10日だった。朝、目を覚まして布団から起きようとしたが、転がるばかりで起き上がることができない。寝ぼけているのかなと思った。53歳の井下田さんは救急車で病院に運ばれた。脳卒中で左半身がまひしていた。(毎日新聞 7月18日1991年)

- (42) ＃中村伸郎さんが毎週金曜日の夜10時、「授業」という芝居をはじめたのは1972年、

64歳のときだ。雨の夜も雪の夜も、舞台に立った。10年間に休演したのはたった3回。  
82年に紀伊国屋演劇賞を受賞した。(毎日新聞 7月7日1991年)

さらに、次の(43),(44)は新聞の「若い日の私」という欄に掲載されていた文章の冒頭部分であるが、分裂文のXの部分で表されているのは話者自身の経験であり話者と聞き手との間で共有されるような知識ではない。

(43) #私が東京外語でロシア語を学びはじめたのは、昭和17年4月のことである。前年の12月8日に太平洋戦争がはじまり、世の中は軍国主義の色彩が日に日に濃くなってきていたころである。(毎日新聞 1月25日1990年)

(44) #私が日本女子大に入学したのは1946年、敗戦の翌年である。住む家がない、食物がない、学費もなく進学できない……そんな生活苦のなかで、学生であることが「負い目」に感じられるような時代であった。(毎日新聞 4月5日1990年)

(37)～(44)においてもやはり分裂文によってトピックが談話に導入され、後に続く部分で導入されたトピックをもとに話が展開されているのがわかる。

### 3.2.3. 談話の中程に現れる分裂文

談話の中程に現れる分裂文は、それが使用される場面を先行部分あるいは後続する部分との関係に注目して細かく見ていくと六つのタイプに下位分類される。

#### (1) 追記

このタイプの分裂文は、先行部分における記述を補ったり、情報を付け加えたりするのに用いられる。

(45) このような傾向は55年、川崎市で浪人中の息子が両親を金属バットで殺した事件。さらに昨年、東京都目黒区で起きた中学生による両親と祖母殺しなどに共通するものであると思う。典型的な中産階級の家庭に育ち過剰なほどの両親の期待を背にささいな挫折を「落ちこぼれ」と受け止める感性。さらに共通するのは殺人という重大な行為を犯しながらその認識が希薄な点である。(毎日新聞 1989年)

(46) さらに府警が心配しているのは殺害犯人が黄劉さん同様来日中の外国人であるケース。(毎日新聞 1989年)

#### (2) 話題転換

次例では同構文が話題を転換する際に使われている。

(47) 明治30年の夏、大学生の柳田国雄は渥美半島の突端、伊良湖岬で浜に打ち上げられたヤシの実を見た。(中略) 治承元年平家打倒の陰謀を企てたかどで俊寛は平康頼らとともに鬼界が島に流された。康頼は名前を記した卒都婆千本を海に流したところ

(中略) ヤシの実や卒都婆を運んだのは黒潮である。フィリピンと台湾との間のバジー海峡付近にはじまり… (毎日新聞 1989年)

- (48) 札幌市内の市立小学校の保健室。「今日も来てたのよ。おなかが痛いって、1時間くらい寝てったかな」。養護教諭の浅田玲子さん(42) = 仮名 = が話す。同校4年の美穂ちゃん(9つ) = 同 = が、塾で算数を習い始めたのは2歳の時。習字は4歳から。けいこ事はどんどん増え、今は月曜日が算数、火曜日が水泳と習字、… (毎日新聞 6月13日1991年)

これまでに観察してきた分裂文の例には、程度の差はあるものの本例に類似した働きをしているものが多い。これは日本語の分裂文の主たる機能が、前節で見た談話全体の主題を導入する伝聞表現と異なり、一時的なトピックないしサブトピックを導入することであることと関係があるものと思われる。

### (3) 場面設定

分裂文/XのはYだ構文が聞き手のイメージを喚起するのに使われている。Xの部分で聞き手の頭の中にイメージを描かせて導入のお膳立てをしているのである。

- (49) 鎧戸を閉じた窓のそばで革張りのイーgerチェアに座っているのは、かつてヨーゼフゲッベルズのナチ宣伝省でユダヤ人問題のエキスパートとして鳴らしたハンスアブラーである。戦後すぐオデッサの手でエジプトに逃れ、以来同地に住んでいるアブラーは… (中略) …彼の左側に座っているのは、やはり元ナチ宣伝省のスタッフで現在同じくエジプト情報省に務めているルドウィヒハイデンである。ハイデンは… (フレデリック・フォーサイス/篠原 慎 訳「オデッサファイル」)

本例は、写真や絵のキャプションに近い。次例は、写真の説明文そのものである。

- (50) 地元選出のジョゼフケネディ下院議員の顔をこすっているのは同センターで手足が不自由な人たちの日常生活を助ける訓練を受けているサルウイニー君です。(毎日新聞1989年)

このキャプションに通常の語順の文をもってきたのでは写真とキャプションがうまくつながらない。

### (4) 対比

追記用法では、先行部分と類似の情報が分裂文によって提示されるが、以下の例では、先行部分あるいは後続部分とは対照的な情報が同構文によって提示されている。

- (51) 「Z-100」は昨年5月に申請が出され、ほぼ1年で承認にこぎつけた。あっと驚く効果があるかといえば、厚生省は「取り立てて注目に値する効果があるわけではない」と断っている。それなのにとんとん拍子のスピード承認。この薬は運がいい。不運な

のは丸山ワクチンだ。抗がん剤として製造認可申請が出たのは1976年、中央薬事審議会は81年に「有効性を確認できず、現段階では医薬品として承認することは適当ではない」と結論を下した。(毎日新聞 6月7日1991年)

- (52) スーパーに七草セットが並んでいた。「君がため春の野に出でて若菜摘む」とうたったのは古今集の昔。いまは冬のさなか、暖房のきいたスーパーでプラスチックのケースに入った若菜を消費税込みで買う時代。(毎日新聞 1月7日1990年)

#### (5) 強調

分裂文／XのはYだ構文に先行する部分でいくつかの情報が与えられた後で、そういったものの中でも特にYという形で強調される。

- (53) 日本人従軍慰安婦には、かつて娼妓だった人が多かった模様だが、彼女たちに対しては、「お国のためのご奉公、天皇陛下の御為だから」という甘言で釣った、という。ごくごく一部の女たちを除いて日本人慰安婦たちも悲惨といえたが、わけても悲惨きわまるのは朝鮮人の従軍慰安婦たちであろう。彼女らは、人狩り同然で、無理やり腕づく、カづくで故郷から連れ去られ、はるかかなたの戦場に送られ、想像を絶するような苦行を強いられたのであった。(毎日新聞 2月5日1990年)

- (54) 歳時記の四季の区分からいうと、いまはもう盛夏ということになる。昔なくて、いまある季語もある。“母の日”“桜桃忌”“ヨット”“プール”などがそれであろうか。しかし圧倒的に多いのは、昔ながらの季語である。四季の変わりがあざやかで、折々の草花が豊かな日本の自然の故であろう。(毎日新聞 6月22日1991年)

#### (6) 意外性

分裂文／XのはYだ構文のXとYの部分に通常は結び付かない、あるいは結び付くはずがないと考えられるような要素を置くことによって意外性を表す。

- (55) 判事のめざすは町一番のホテルで、そこではシャノン産のすばらしいサーモンが食べられるのだ。彼がそのホテルに向かって道路を横切ろうとしたとき、一台のピカピカに磨きあげられた高級車がホテルから出てくるのが見えた。なんと、運転しているのはオコナーではないか。「見ましたか、いまのはあいつですよ」判事の傍で、驚きの声が上がった。声につられて彼がふと右を見ると、トラリーの食料品屋がわきに立っていた。「見ましたよ」高級車はホテルの前庭から出てきた。オコナーのわきに、黒づくめの服装をした男がすわっていた。(フレデリック・フォーサイス／篠原 慎訳「帝王」)

- (56) 「寒いね。帰ってくるまでお利口にね」。兵庫県西宮市の私立大二回生、健治 (20) =仮名=がほおずりしたのは、白いクマのぬいぐるみ「ミカちゃん」。高校時代、片

思いの同級生の彼女にプレゼントにと買い、渡せないまま、いつか彼女の身代わりになった。ミカちゃんは彼女の名前。真っ白だった毛は、手あかで黒ずんできたが、気にならない。(毎日新聞 1月6日1990年)

以上、分裂文が様々な側面を持つことを見てきたが、ここで注目すべきは、(1),(2),(3)のタイプの分裂文と(4),(5),(6)のタイプの分裂文との間には一線を画することができるということである。つまり、「対比」「強調」「意外性」を表す分裂文においては他項との関係が問題になるが、「追記」「話題転換」「場面設定」を行う分裂文では他項との関係は問題にならないのである。したがって、(1),(2),(3)のタイプの分裂文に比べて(4),(5),(6)のタイプの分裂文の方が先行文脈寄りであるといえる。

#### 3.2.4. 談話の最後に現れる分裂文

次例に見られるように分裂文は談話の最後にも現れる。

(57) 入隊してからしばらくして、学生時代の病気が再発し、長い白衣生活の後に除役になり帰された。もとの画室の生活に戻って、昭和16年に太平洋戦争が始まる。緒戦のシンガポール総攻撃に、横須賀重砲兵連隊が参加していたことを知ったのは、かなりたって日本も敗戦の色が濃くなってきたころである。(毎日新聞 1月18日1990年)

このタイプの分裂文は、話が展開されていくべき後続部分が存在しないので、これまで繰り返し主張してきた分裂文の話題導入機能に対する反例であると思われるかもしれない。しかしながら、このタイプの分裂文を用いるねらいは、本来続くべき部分を聞き手に考えさせ余韻を残して文章をしめくくりにあるのである。以下の例も参照されたい。

(58) イランの首都テヘランから始めて、イスファハン、マシヨードなど北部の主要都市をすべて回り、さらにアフガニスタンまで足を延ばして、5年目では、毎年5万台の電気コタツを売った若い日の私でした。このセールスで学んだのは、マーケットは予想外のところにあり、汗と根気によって、商売は可能になるという、稲井会長を通じて知った松下イズムでした。(毎日新聞 9月25日1991年)

(59) 日本人が一戸建ての家に執着するのは、建物というより庭のせいかもしれない。猫の額でもいい、庭があれば心が落ち着く。その至福感は宗教的といってもいい。現代人も4世紀の三重の人とさほど違いはない。違うのは土地の値段だ。(毎日新聞 8月10日1991年)

次節で談話の最後に現れる非限定的修飾節を取り上げるが、同言語形式では、トピックの導入ではなく、非談話主題化といったことが行われており、談話の最後に現れる分裂文とは、その機能が大きく異なる。



### 3.2.5. 降格分裂文

ここで取り上げる分裂文は3.2.1.～3.2.4.で観察した分裂文とは異なった特徴を持つ。まず(60)の例を見られたい。

- (60) 1989年は一円玉の年として永久に記憶されるだろう。4月の消費税実施で一躍脚光をあびたのに引き続き、こんどは広島市の水道システム設計入札で二千九百万円を抑えて堂々、一円が勝利を収めた。「皇国の興廃この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」と檄をとばしたのは日本海海戦（1905年）を前にした連合艦隊の東郷平八郎指令長官だった。一円玉一つ握って入札会場に出掛けた富士通広島支店は「企業の興廃この一銭にあり」の心境に違いない。(毎日新聞 1989年)

本例の分裂文／XのはYだ構文の役割は、後続する部分、特に「企業の興廃この一銭にあり」から考えて「皇国の興廃この一戦にあり」を談話に導入することであると思われる。3.2.1.～3.2.4.で見してきた分裂文がYを話題として談話に導入していたのとは逆である。通常の語順では「東郷平八郎指令長官」が目立ち過ぎて文脈にそぐわないので主語の位置から分裂文のYの位置に降格されている。コメント(X)とそれを行う人物(Y)ではコメントの方が重要であり、人物は分裂文に含まれる形で文脈に導入されはするが後続部分に当該の人物に関する記述が現れるわけではない。同構文のこういった特徴を踏まえて(60)のような分裂文を3.2.1.～3.2.4.の分裂文と区別して降格分裂文と呼ぶことにする。降格分裂文の例を続けよう。

- (61) 「昭和50年代始めの早期才能開発論の台頭とともに起きたのが第一次児童英語ブームだったとすれば、一昨年ごろから始まった第二次ブームは“国際化”がキーワード」と解説するのは、児童英語教育の専門家などでつくる民間団体で、毎年子供のための英検「全国統一児童英語技能検定試験」を実施している日本児童英語振興協会（本部・大阪府吹田市）の寺地俊二理事長（46）。寺地理事長によると、中学入学前に英語を学ぶ子供は年々増え、現在その数は300万人とも推定され、児童専門の英語教室だけでも2万は下らない。(毎日新聞 1989年)

降格分裂文のYの位置に現れる人物は降格されているとはいってもXの部分に言わば“ハクをつける”だけのインパクトを持つ人物でなければならない。Yにただの人がきたのでは同構文のXの部分で談話に導入するという機能は果されない。

次例では降格分裂文が談話の最後に現れている。

- (62) 海と夏空を背景に「つかの間の陰りと罪の意識」を描き続けた作家は34歳で事故死する。だが、この青春小説は鮮烈に生き続ける。「余りにも生々しすぎる青春の再現は醜悪である」といったのは「鯨神」で芥川賞をとった直後の宇能鴻一郎氏だったが。(毎日新聞 6月10日1991年)

本例における分裂文使用のねらいは3.2.4.で見たものと同様に「余りにも生々しすぎる青春の再現は醜悪である」に続く部分を聞き手に考えさせることで余韻を持たせて文章を終えることであると思われる。

次の(63),(64)では降格分裂文が談話の冒頭に現れている。

(63) # 「今日の日本を知るには、応仁の乱以後の歴史を知っておったら沢山です」とい  
いきったのは、京大中国学の始祖として有名な内藤湖南だった。新聞記者出身の歴史  
家らしい単刀直入の表現で、いまなおお世に富む。現代の日本の階級も生活も文化も  
応仁の乱(1467-77年)以後に形づくられたという、これは湖南一流の史観にもとづ  
いている。(毎日新聞 10月8日1990年)

(64) # 台風を「熱帯からやってくる暴走給水車」と呼んだのは東大海洋研究所の木村竜  
治さんである。熱帯生まれの台風は大量の水分を含み、その水をはるばる日本列島に  
まで運んでくるから、というのだ。カラカラの首都圏に待望の雨をたっぷり降らせた  
台風11号は、文字どおり給水車だった。底まで干上がった利根川上流のダムに水を送  
り込み、貯水量は1億トンの大台をやっと回復した。(毎日新聞 8月11日1990年)

これらの例においても同構文がXの部分を談話に導入し、後続部分でそれについての記述が行われる形で話が展開しているのがわかる。以上、本節では、日本語の分裂文の談話における機能を分析したが、その結果、以下の緒点が明らかになったことと思う。

- i) 日本語の分裂文／XのはYだ構文の談話における主たる機能は、談話に話題(Y)を導入して話を展開していくことである。先行文脈を受けはするが聞き手の知識の状態に関して何らかの想定を行っているわけではない。
- ii) 同構文の機能を先行部分、あるいは後続部分との関係に注目して細分化してみると、「追記」「話題転換」「場面設定」を行ったり、「対比」「強調」「意外性」を表したりしていることがわかる。
- iii) i) のタイプの分裂文に対して、通常の語順のままでは目立ち過ぎる要素(主語の位置の人物)をYの位置に降格させ、Xの部分を談話に導入する降格分裂文が存在する。

分裂文によって談話にトピックが導入されるとはいても、そのトピックの性格は、前節で見た伝聞表現によって談話に導入されるトピックとは異なる。伝聞表現によって談話の冒頭に導入されるトピックは、談話全体のトピックあるいはディスコーストピックであるのに対して、分裂文によって談話に導入されるトピックは、同構文が談話の冒頭に現れる例も含めて、談話全体のトピックではなく、談話が進行する中で他のトピックに取って代わられうる一時的なトピックあるいはサブトピックである。

#### 4. ディスコースを終える言語形式

名詞修飾節には、(65)のように被修飾名詞の指示対象を限定する限定的修飾節と、(66)のように被修飾名詞を限定しない非限定的修飾節がある。

(65) 日本語が話せる人

(66) 日本語が話せる花子

(65)では、「人」が「日本語が話せる」という修飾表現によって、その指示対象を限定されている。これに対して、(66)では、「日本語が話せる」という修飾節の有無にかかわらず、「花子」の指示対象は一定している。英語の名詞修飾節すなわち関係節についても同様の区別が認められるが、(67)(68)から明らかなように、日本語と違って形式上の区別も存在する。

(67) the man who can speak Japanese

(68) Mary, who can speak Japanese

日英語の非限定的修飾節の機能を構文レベルで考察した伊藤（1995）では、同修飾節の基本的な機能を主節に対して関与的な情報を付加することであるとした上で、主節に対する関与性の在り方を詳細に観察することによって、同要素が主節が表す事態に対する理由や根拠を表したり、主節で提示されるコメントに対する重みづけを行ったり、主節で表される事態が生じた時に被修飾名詞で表される人や物がどのような状況にあったかを表したり、主節に対して対比的な情報を表したりしていることを明らかにし、さらに、英語の非制限的關係節には等位接続機能が認められるが、日本語の非限定的修飾節にも類似の機能が観察されることを見た。

本節では、日本語の非限定的修飾節が談話においてどのような機能を果しているかを明らかにする。構文レベルでの分析においては、非限定的修飾節と主節との関係を見たわけであるが、談話レベルで分析する際には、同要素と先行文脈との関係を見ていくことになる。

##### 4.1. 被修飾名詞の談話への新規導入の円滑化

日本語の非限定的修飾節を先行文脈との関係に注目して観察してみると、その主たる機能のひとつが先行文脈に対して関与的な情報を表し、被修飾名詞が談話にスムーズに導入されることを助けることであることが分かる。次例を見られたい。

(69) サミットの元祖は1975年11月に行われた第一回先進国首脳会議、ランブイエ・サミットである。会議を提唱したジスカールデスタン仏大統領の貴族趣味も手伝って3日間、首脳はランブイエ城で起居をともにし、俗世間と絶縁した。ローマ法王を選挙するため、枢機卿は外界から遮断され、出席者の3分の2の票が得られるまで投票を継続する。これがコンクラーベと呼ばれる方法だ。ジスカールデスクン大統領が採用し

たのは、朝から晩まで顔を突き合わせて話をするコンクラーベ的合宿。ランブイエ城に閉じ込められた三木首相は、城の柵ごしに日本の役人を見て「おれは大丈夫だ。心配するな」と声をかけたそうだ。(毎日新聞 7月8日1993年)

本例において、「三木首相」は、談話に初出の要素である。下線を施した非限定的修飾節は、先行文脈、特に「首脳はランブイエ城で起居をともにし、俗世間と絶縁した」の部分に対して関与的な情報を表している。このような非限定的修飾節が付加されることで、被修飾名詞「三木首相」が談話にスムーズに導入されていると考えられる。非限定的修飾節を取り去ると先行部分とのつながりが悪くなり、当該の構文のすわりが悪くなる。以下にあげる(70)(71)の非限定的修飾節にも同様の機能が認められる。

(70) 総合職だ女性管理職だともてはやされたのは、なにも均等法で経営者がとつぜん男女平等に目ざめたわけでも何でもない。たんに人手不足とバブルのおかげだった、というおハナシ。不況がくれば職場の男女平等など、採用の時点でふきとんでしまう。『ワーキングウーマンのサバイバルガイド』(学陽書房)という本を昨年出版した福沢恵子さんと、最近一緒に仕事をした。「働く女性が落ち込みそうになったとき読む本」と副題がついた本書は、彼女自身の職場体験を多くのワーキングウーマンとの面接をつうじて、働く女性にこんせつていねいに「こんな時、どうする？」の実践的ノウハウを伝えている。(毎日新聞 3月30日1993年)

(71) 大阪のベッドタウン、高槻市のある中学校は、新設された年に開業した新幹線を校歌に歌い込んだ。近くを走る新幹線に希望の明日を託したもので、高度成長期の高ぶった気分を映した歌だった。しかし、新幹線は騒音をまき散らす。「世界に誇る新幹線」という歌詞の校歌はどうも……、という声も出て、山川など近郊の自然を歌った校歌に作りかえられた。モダニズムは校歌になじみにくいという一例だろう。甲子園球場に流れる校歌とともに盛り上がる春のセンバツは26日開幕する。5年ごとの記念大会にあわせて、大会歌も阿久悠作詞・谷村新司作曲の「今ありて」に変わる。(毎日新聞 3月9日1993年)

さらに、次例を見られたい。(＃は談話の冒頭部分であることを示す)

(72) ＃明治末の東京が舞台だ。芸者相手に恋文の代筆屋をいとなむ奈津と、売れっ子作家涼月と……。ほのかな恋心と温かい人情が古き時代への郷愁を誘う。二十七日の第二回読売演劇大賞贈賞式で、最優秀作品賞を受ける「恋ぶみ屋一葉」(松竹)だ。しつとりと奈津役を演ずる杉村春子さんが大賞・最優秀女優賞に輝く。新劇女優をめざして、故滞・広島から上京した杉村さんが、築地小劇場に入ったのは1927年(昭和2)だった。(読売新聞 2月22日1995年)

本例においては、最初の非限定的修飾節、「しつとりと奈津役を演ずる」が先行部分に村して関与的な情報を表し、被修飾名詞、「杉村春子さん」の談話への導入を円滑にしており、これに続いて現れる非限定的修飾節「新劇女優をめざして、故郷・広島から上京した」は、主節に対して関与的な情報、つまり付帯状況を表しているのが分かる。次の(73)でも、先行部分に対して関与的な情報を表して被修飾名詞の談話への導入を円滑化する非限定的修飾節に続いて、主節に対して関与的な情報(付帯状況)を表す非限定的修飾節が現れている。

- (73) #パリの中心街に五つ星のブリストル・ホテルがある。十年前ホテルの菓子部の調理場で小柄な日本女性が二十キロ近い大ナベを抱えて奮闘していた。渋谷で小さな菓子教室を開いている加藤久美子さんは「疲労の十倍の発見と吸収があった」と振り返る。菓子作りに生きがいを見つけた加藤さんは当時、女性として初めて調理場入りを認められた。(読売新聞 12月27日1993年)

さて、これまでに観察してきた非限定的修飾節は、談話の中程に現れていたが、非限定的修飾節と結び付けられるべき先行文脈は、言語的な文脈に限られず、同要素は談話の冒頭部分にも現れ得る。次例を見られたい。

- (74) #きのうの「納采の儀」のために小和田雅子さん宅を訪れた菅野弘夫東宮大夫は携帯電話を用意していた。儀式が済むと、その電話を取り出して皇太子さまに報告したそうだ。(毎日新聞 4月13日1993年)

本例では、先行文脈が存在せず、先行文脈に関与的な情報を表す非限定的修飾節が付加されることで非修飾名詞が談話にスムーズに導入されるという先の分析があてはまらないように思われる。しかしながら、本例の場合は、言語的な先行文脈は存在しないものの、一般的な知識といった非言語的な文脈とのつながりが認められ、やはり非限定的修飾節による非修飾名詞の談話への新規導入の円滑化と考えるとよからう。以下にあげる(75)–(77)についても同様である。

- (75) #ハワイの砂浜に小麦色に日焼けした前田美波里を寝そべらせた化粧品の広告。今年のアカデミー賞の衣装デザイン賞に輝いた石岡瑛子さんは、1966年にこの懐かしいポスターをつくった女性だ。化粧品のキャンペーンガールは色白美人に限るという固定観念を打ち破り、当時としては大胆なポーズが話題にもなった。(毎日新聞 4月1日1993年)

- (76) #米軍をはじめとする多国籍軍が軍事介入したソマリア。この国で生まれた千人の子どものうち二百十一人が五歳になるまでに死亡している。五人に一人強。驚くべき死亡率だ。(毎日新聞 12月19日1992年)

- (77) #前回はバイオリン部門で諏訪内昌子さんが優勝したチャイコフスキー国際コンクールは、ソ連邦の崩壊で存続が危ぶまれたが、来年夏にモスクワで10回目の開催が

決まった。1958年から4年ごとに開かれ、国際的にも権威あるコンクール。(毎日新聞 5月26日1993年)

#### 4.2. 非談話主題化

次例に見られるような非限定的修飾節については、前節で行った「先行文脈に關与的な情報を付加することによって被修飾名詞の談話への新規導入を円滑化する」といった分析があてはまらない。

(78) ジェットさんは、現在60人いる、そうした出向社員の1人。エンジン回りの生産効率向上を、日本人部下3人を便って研究している。オフィスの会話はすべて日本語。会議で専門用語が必要な時だけ、通訳がつく。(中略)「確かに本田は日本で生まれた会社だが、米国ホンダでますますいい車を造って、世界中から喜ばれたい」。ブロンドの口ひげが似合うジェットさんだ。(毎日新聞 9月28日1993年)

「ジェットさん」は、談話に初出の要素ではない。当然のことながら、伊藤(1995)でそうしたように主節との関係で考えることも出来ない。類例として以下の(79)があげられる。

(79) ただ「家庭を顧みず、自分の時間もなく、仕事に忙殺されるのでは寂しい」と思う。「出世することが男の夢かもしれないが、上へ行く人がうらやましいとも思わない」。(中略)サラリーマンにどっぷり漬かることを自分のどこかが拒んでいる。そんなもう一人の自分は、仕事と共生できる、自分なりの研究テーマを持ちたいと思っている。とはいうもののそれがいったい何なのか、まだわからない岩城さんだ。(毎日新聞 7月23日1993年)

次の(80)(81)は、先の2例と類似の例ではあるが、非限定的修飾節の部分が先行部分をまとめあげるような内容を表している。

(80) 現在、海外システム営業部門の第二推進課長として、男十人、女三人の課員を指揮する伊勢谷さんが、入社十九年のキャリアで得た「女性と職業」の結論。「すべてを我慢する必要はないが、男性社会の仕組みの中で、初めから抵抗すると長続きしない。自分を生かすには、生かせる状況を自分で作ること」休日、夫婦でテニス、ゴルフ、旅行を楽しむ。今年の夏は、朝間高原のペンションを借りて過ごす計画を立てている。家事も手際よくなった。いつの間にか「家庭と会社の総合戦」になっている伊勢谷さんである。(毎日新聞 7月9日1993年)

(81) しかし、やっぱり不自然」と、石井さんは考える。「男の一人暮らしも楽ではないが、残された家族はもっと大変だ。精神的にも物理的にも、頼れる男手がなくなるのだから」石井さんの単身生活は、まもなく二年目に入る。「二年目からのほうが大変だよと、

体験者がアドバイスしてくれましたね。体には気をつけようと思っています」。不自然な生活に負けてなるかと、腹を据える石井さんだ。(毎日新聞 3月19日1993年)

(78)–(81)のような例は、談話の最後に見られることが多い。このような非限定的修飾節の機能をどのように分析すべきであろうか。これまでの観察から明らかのように、同要素は、主節に対して関与的な情報を表してはいないし、被修飾名詞の談話への新規導入を円滑化することも行っていない。(78)–(81)に見られるような非限定的修飾節を含む構文を使用することの狙いは、情報を付加することにあるのではなく、連体修飾構造を作ること自体にあるように思われる。つまり、「ジェットさんは、ブロンドの口ひげが似合う」とか「伊勢谷さんは、いつの間にか「家庭と会社の総合職」になっている」といった表現に含まれる「ジェットさん」あるいは「伊勢谷さん」を例文中にあるような連体修飾構造の被修飾名詞の位置にもって来ることに狙いがあると考えたい。そして、そうすることによって「ジェットさん」あるいは「伊勢谷さん」がいわゆる ディスコーストピックではなくなり、談話がしめくくられるといった効果が出て来るのではないかと思われるのである。実際、先の例において、「ジェットさんは、～」あるいは「伊勢谷さんは、～」といった表現を用いると、「ジェットさん」あるいは「伊勢谷さん」についての記述がさらに続くような感じがして文脈にそぐわなくなってしまう。このような非限定的修飾節を含む連体修飾構造形成の在り方をここでは(要素の)非談話主題化と呼んでおく。

## 5. おわりに

トピックの性格がそれを談話に導入する言語形式によって異なるか否かは、非常に興味深いテーマである。小論では、談話にトピックを導入する際に用いられる言語形式として、伝聞表現、分裂文および非限定的修飾節を取り上げ、それぞれの言語形式が談話において果たす機能の特徴について分析を行った。

伝聞表現と分裂文が談話にトピックを導入していると見做しうる多くの事例を検討したが、伝聞表現によって談話に新規に導入されるトピックは、談話全体のトピックであると考えられるのに対して、分裂文によって談話に新規導入されるトピックは、談話全体のトピックではなく、談話の流れの中で別のトピックに取って代わられるような一時的なトピックである。非限定的修飾節には、伝聞表現や分裂文には観察されない非談話主題化とでもいうべき機能が認められる。

参考文献

- Akiyo Asano, Ryuichi Washio, Kunihiko Ogawa 1979 "Aspects of Discourse-Initial Sentences: A Case Study from English and Japanese" 研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- Akmajian, A., 1970 "On deriving cleft sentences from pseudo-cleft sentences." *Linguistic Inquiry* Vol.1, No.2
- Chafe, W., L., 1976 "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view." In: Li, Charles N.(ed.) *Subject and Topic*. Academic Press
- Declerck, R., 1984 "The pragmatics of It-clefts and Wh-clefts." *Lingua* 64
- Fox, Barbara A. and Thompson, Sandra A. 1990 "' A discourse explanation of the grammar of relative clauses in English conversation" *Language* Vol.66 No.2
- Givon, T. et al.ed.s. 1983 "*Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*" John Benjamins
- Higgins, F., R., 1976 "The pseudo-cleft construction in English." Indiana University Linguistics Club
- Inoue, Kazuko, 1979 "A study of discourse initial sentences." 研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- Inoue, Kazuko, 1982 "An interface of syntax, semantics, and discourse structures." *Lingua* 57
- 伊藤晃 1995 「日英語の非限定的修飾節の構文における機能について」『立命館英米文学』第4号 立命館大学英米文学会
- 神尾昭雄 1990 「情報のなわ張り理論 言語の機能的分析」大修館
- 北原保雄 1981 「うなぎ文の構造」『日本語の文法 日本語の世界6』中央公論社
- Loetscher, A. 1973 "On the Role of Nonrestrictive Relative Clauses in Discourse" *CLS* 9
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 一改訂版一』くろしお出版
- 益岡隆志 2000 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 森本順子 1994 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- Nakada Seiichi, 1971 "Pseudo-clefts: What are they?" *CLS* 9
- 西山祐司 1979 「新情報・旧情報という概念について」研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』
- 仁田義雄・益岡 隆志編 1989 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄編 1995 『複文の研究(下)』くろしお出版
- 奥津敬一郎 1978 「「ボクハ ウナギダ」の文法ーダとノー」くろしお出版
- Pinkhan, J. and Hankamer, J., 1975 "Deep and shallow clefts." *CLS* 11



伊 藤 晃

Prince, Ellen F., 1978 "A comparison of wh-clefts and it-clefts in discourse." *Language* Vol.54, No.4

Prince, Ellen F. 1979 "On the Given / New Distinction" *CLS* 15

Prince, Ellen F., 1981 "Toward a taxonomy of given - new information." In : Cole, P.(ed.), *Radical Pragmatics*. Academic Press

佐藤ちえ子 1981 「日本語の分裂文」『現代の英語学』開拓社

砂川有里子 1995 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」 仁田 義雄編 『複文の研究 (下)』くろしお出版

寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版